

近世富士山信仰の展開 (三)

— 北遠地域 (水窪町・佐久間町) と静岡地域を対象として —

The Development of the Worship of Mt. Fuji in Modern Times (3)

— A Case Study of Misakubo-cho, Sakuma-cho, and Shizuoka-city —

天 野 忍

Shinobu AMANO

(平成二十七年十一月十八日受理)

抄録

平成二十五年六月、富士山はユネスコの世界文化遺産に登録された。これを機に、多くの人々の、富士山の歴史・文化に対する興味や関心が高まっている。

平成二十五年より、近世富士山信仰の展開をテーマに、北遠山間地域を対象として、研究を重ねてきた。本年度は、前年度の課題を整理し、さらに対象地域を旧静岡市内に拡大した。

従来、引用してきた道者帳などの資料に加え、富士山信仰と関わりのある浅間神社関係の古文書を分析し、具体的事例によりながら、研究を進めた。地域の道者たちが、浅間神社や修験、先達たちといかなる関係をもちながら、富士参詣を果たしたか、その実態に迫ろうとした。

キーワード…大宮浅間神社、村山修験、静岡浅間神社、先達、富士参詣道者

はじめに

昨年度、北遠地域の浜松市天竜区の春野町・水窪町・佐久

間町を対象に、『浅間文書纂』所収「第四 公文富士氏記録」

の「三 御炊坊道者帳写」、同「五 道者帳」をたよりに、多くの人々の御協力を得て、北遠地域の富士参詣の実情をまとめることができた。

二つの道者資料は、限られた時期の一宿坊に伝わったもの

であり、その内容は、富士参詣全体を俯瞰するものではない。しかし、いずれも、富士参詣が一般化していく時期の資料であり、近世富士山信仰を検討するうえで、好個の素材である。まとめにおいて、水窪町奥領家の子安神社、佐久間町大井の浅間神社に関しては、なお、課題も残された。神社に伝わる棟札や伝承などの調査である。

これに加えて、本年度は、駿河国の、とりわけ旧静岡市内の事例を調査することとした。

駿河国に関しては、前掲の資料の他に、富士宮市村山の修験大鏡坊に伝わった「駿州檀所帳」がある。これは、天文元年（一五三二）から寛文八年（一六六八）に至る駿河国の富士参詣道者の動向を伝える貴重な資料である。

駿河国の内、静岡地域はその中心域にあり、古くから静岡浅間神社との関わりをもって発展した。静岡浅間神社は、神部神社・浅間神社・大歳御祖神社の三社の総称である。延喜元年（九〇一）、大宮の浅間神社の新宮として勧請されたといわれ、地域の人々から「おせんげんさん」と呼ばれて親しまれてきた。そして、富士参詣道者の篤い信仰を集め、その証として、各地域に浅間神社が祀られ、関連する史跡や伝承も多い。

そこで、本稿では、北遠の山間部の事例に続き、いわば平場に住む人々がいかに富士参詣を果たしたのか、その実情を探りながら、富士山信仰の展開をまとめることとする。

一 北遠人の富士山信仰

（一）水窪町奥領家子安神社の棟札

①天正十二年の棟札

萩原龍夫の『巫女と仏教史』に、奥山家の祭祀になる水窪町奥領家の子安神社に、天正十二年（一五八四）以来の棟札数枚が蔵されている、とある。そのなかで、子安神像については、姥神との関連から詳しく述べられているが、棟札の内容については、説明がない。

そこで、早速、富士山信仰に関わる棟札であるかどうかを確認するため、浜松市中区の富塚にお住まいの奥山伸吾氏にお願いし、棟札を拝見する機会をいただいた。地元で神社の管理にあたられている尾島伸一氏の御案内により、神社の厨子に納められている子安神像を拝観し、棟札を調査した。

その結果、天正十二年の棟札をはじめ、元和八年（一六二二）・明暦元年（一六五五）・天和三年（一六八三）・享保十八年（一七三三）・昭和三十四年（一九五九）の棟札六枚があり、明治八年（一八七五）六月の諸社合祀・移転の経緯をまとめて記す札三枚が確認された。

明治八年六月の札によると、天正・元和・明暦・天和・享

保の棟札は、領家村小畑の氏神である三嶋神社の創建・修復に関わるもので、奥山瀬作家の私宮である火王社以下の諸社とともに、三嶋神社の境内地である三嶋森、奥山家の周辺地などから、奥山家の私有地に遷された経緯が記されている。

天正から享保までの棟札を写し取り、神鏡一面を添え、明治八年六月三十日より同十年十二月二十六日まで、奥山家の神前に置き、同日に私有地に遷した、とある。明治初年の諸社合祀の動きのなかで、私有地の子安神社に遷して祭祀したことが知られる。昭和三十四年の札には、伊勢湾台風による被害により、子安神社が建て替えられたことが記されている。

ところで、手斧削りの跡を残す天正十二年の札を見ると、表面には削り取られたような跡があり、元和八年の札を頼りに判読するが、墨痕も擦れて肉眼では判読できない箇所が多い。そこで、静岡市にある静岡県埋蔵文化財センターの御協力を得て赤外線撮影を行い、その判読を試みた。

その結果、天正・元和の棟札の天部に種字が見え、続いて神名の「嶋大明神」、「暦嶋大明神」が確認できた。種字に詳しい常葉大学名誉教授の竹中智泰氏からは、愛染明王の種字である、との御教示をいただいた。

検討の結果、天和三年の札に、明らかに三嶋大明神社と記されていること、伊豆の三嶋神社の別当寺院が愛染明王を本尊とする愛染院であったこと、嶋大明神の神名は三嶋大明神の略と考えられること、三嶋神社で三嶋暦が作製されていた

ことなどから、天正十二年十一月、伊豆三嶋神社より勧請されたことが想定された。勧請に関わったと思われる人物に、権郎右衛門尉・十郎四郎・藤左近の名が見える。

奥山家の東隣に、菩提寺の附属寺がある。その山号が三嶋山であり、北側裏山の平地が、三嶋森であると想定した。

奥山家には、「天和之比写置テ、又享保八年二写ス、此年御棟札見得共文字不見得候」と注記する天正十二年棟札写の古文書が伝わる。これによると、天和の頃に書写され、また、享保八年の書写の折にも棟札を実見したが、すでに文字が見えないところがあったようである。社殿修復の折に、書写されたのであろう。ともあれ、古文書により、他の不明箇所も確認することができたわけであるが、残念ながら富士山信仰に関わる要素は認められていない。

②浅間塚に祭祀の浅間神社

前掲の明治八年六月の札に、奥山家の私宮として、火王社・水王社・日月社・山神社・天白社・愛宕社・北野天神社・天満宮・金山荒神社・浅間大神社・疱瘡神・稲荷社・神明社など、十三社の棟札の概要が記され、多くの神々が祀られていることが知られる。そのなかの一社が浅間神社である。嘉永六年（一八五三）丑二月の棟札によると、

（表）嘉永 六年 神 主 万 歳

奉建立浅間大神社當長久

丑二月廿八日

（裏）遠州周智郡領家村

高木讃岐正

豊後

戌年男 家内安鎮

寅年女

亥年男

右社ハ家北ノ方

浅間塚ニ有之

とある。幕末の嘉永六年、戌・寅・亥年生まれの男女三人が、家内安鎮を願ひ、奥山家北の方の浅間塚に浅間神社を建てたことが知られる。

棟札の年代は幕末であるが、浅間神社の創祀は古く戦国時代に遡るのではないかと考える。前掲の戦国期「御炊坊道者帳写」の村名・地域名に「をはた衆」（小畑衆）の表記があり、小畑の奥山氏に代表される人々の富士参詣が想定されること、慶長・元和期の「道者帳」にも、元和二年（一六一五）六月三日、奥山氏と思われる「おくの山殿」二人が、坊入百文を持って富士宮の宿坊に宿泊した記述が見えるからである。おそらく、富士参詣の証として、奥山家の当主が大宮の浅間神社から勧請したのであろう。

奥山家の北の方の浅間塚について、尾島氏に尋ねたが、不明とのことである。現在、子安神社の脇に祀られている二軀

の石造の金剛界大日如来像については、「御末社様」と呼んでいるという。この二軀のうち一軀は、刻銘により、寛文十三年（一六七三）八月、小畑村の某により、新造されたことが明らかである。おそらく、浅間塚とは、現在の子安神社の境内に接した地の、石仏が祀られている場所を指しているのではないだろうか。

（二）佐久間町大井浅間神社の棟札

大井の浅間山に鎮座する浅間神社の由来や富士講の傳承については、「近世富士山信仰の展開（二）」で詳しく述べたが、宝暦五年（一七五五）の棟札については、途中で終わっている。『佐久間町史』編纂資料により、浅間神社に石仏が奉納された経緯を明らかにすることはできたが、石仏を奉納した奉加人や諸費用などの詳細については、なお不明であった。

そこで、浅間神社の棟札を保管する貴船神社の宮司田開忠夫氏に、棟札の拝観許可をお願いし、貴重な資料を提供していただいた。

宝暦五年七月二日の棟札の概要をまとめると、次のとおりである。表面には、石仏奉納の由来を述べている。①、②、③は接続を意味する。

表1は、裏面の概要を記したものである。

（表面）

天下泰平国土安穩惣産子繁昌信心之願主諸願成就子孫①

御代官大草太郎左衛門尉 大井村②

奉建立富士権現之末社八葉尊大日如来姥神石尊各々③

宝暦五亥七月二日

③成就如件

大井郷西村先達神主願主

片桐与兵衛正方

①長久如意守護処一字

②西村名主片桐左仲 西村片桐五兵衛

表1

一之嶽延命地藏	セト村片桐藤四郎
金二朱□文奉加	間庄片桐甚五左衛門
二之嶽阿弥陀如来	間庄村片桐左兵衛
金二朱百文奉加	同熊之進
大日如来 願主	西村片桐五兵衛
金□□奉加	西村 杉元重三郎
三之嶽觀世音菩薩	
五百文奉加	
四之嶽釈迦牟尼如来	□金兵衛
五之嶽弥勒菩薩	西村拾二人
金一分三百文	
六之嶽薬師如来	大井村片桐左仲
金二朱百文奉加	

七之嶽文殊菩薩

五百文奉加

八之嶽宝勝如来

二朱百文奉加

姥神

片桐伊織

同 亀五郎

片桐左仲

西村中 七百文奉加

この他にも、奉加人・村名が挙げられている。金一両三分六百文が奉加され、石仏の代金として、金一両三分が遠州船明村の石屋信助に支払われている。おわりに、諸願成就候也と結んでいる。

これにより、大井郷西村の先達神主の片桐与兵衛が願主となり、天下泰平・国土安穩を願い、大井村名主片桐左仲、西村の片桐五兵衛らに呼びかけて地域の多くの人々の奉加を得、寛文三年（一六六三）に勧請された浅間神社に、富士浅間八葉九尊仏・姥神の石仏を奉納した経緯が明らかである。現在、大井西村地区には、御嶽信仰を信奉する人々が多い。

二 戦国期駿河人の富士山信仰

（一）駿河人の富士参詣

①「御炊坊道者帳写」の地名

はじめに、「御炊坊道者帳写」に見える地名を挙げる。

「御炊坊道者帳写」の表紙には、追筆で

永正九年之古帳写 八木御炊官

とある。これに対し、『浅間文書纂』の編者は、本文の中に永正十□年・永禄六年の年紀が見えることから、「永正九年之古帳」に疑念を呈する。

「御炊坊道者帳写」では、東海地域の国々や郷村の名がまとめて列記されている。道者帳の初頭に掲載されている地名に、国名は見えないが、その内容から見て駿河国に該当する。いわゆる静岡県中部地域の、大井川左岸から富士川右岸に至る広い範囲に分布する地名である。

これらの地名から、富士参詣の折、先達に率いられて、大宮の浅間神社の門前に営まれた御炊坊に宿泊した駿河の富士道者の姿が想像される。現在、残念ながら道者帳写の原本を確認することはできないが、戦国期における富士山信仰の広がりを伝える貴重な資料である。表2は、「御炊坊道者帳写」に記されている戦国期駿河国内の地名について、『角川日本地名大辞典 22 静岡県』、地域の人々の御示唆によりながら、その現在地を合併前の市町名に比定したものである。現在地の比定にあたり、複数の候補地が考えられる場合には、候補地を先に、（ ）内に次候補地を示した。なかには、所在地が不明の地名もある。地名の検討には、浅間神社の祭祀の有無が参考となるが、勧請年月が明らかでない神社が多い。

表2

古帳地名	中世地名	合併前市町名
みや□さ□	宮が崎	静岡市宮が崎
横内		静岡市横内
いましゆく	今宿	由比町今宿
下なこ□□		
おきつ	興津	清水市興津
にしかう地	西河内	静岡市西河内
ふしえだ	藤枝	清水市西河内 (又は清水市西河内)
やふた	藪田	藤枝市藤枝
よつあし	四足	藤枝市藪田
しまた	島田	静岡市四足
やわた	八幡	島田市島田
わらしな	藁科	静岡市八幡
はかた		静岡市藁科
みつのうへ	水上	藤枝市水上
はなり		
としま		川根町渡島
なへしま		島田市鍋島
こまこへ		清水市駒越
せな	瀬名	静岡市瀬名
やいつ	焼津	焼津市焼津
はなし	葉梨	藤枝市葉梨
花くら	花蔵	藤枝市花倉

えしり□□□は	江尻	清水市江尻
うつのや	宇津ノ谷	静岡市宇津ノ谷
かたのかみ	方上	焼津市方ノ上
小かわ	小河	焼津市小川
さし	岸	島田市岸
さか本	坂本	焼津市坂本
あち河		島田市阿智ヶ谷
とらめ		
せとのや	瀬戸谷	藤枝市瀬戸ノ谷
まへ島	前島	藤枝市前島
河ね	河根	川根町北
うるしはた	漆島	藤枝市築地
うしつま	牛妻	静岡市牛妻
うとふ	有東	静岡市有東

②天文十八年の浅間神社流鏑馬郷役

前掲「御炊坊道者帳写」の地名を分析するにあたり、浅間神社の神事との関わりをもつ駿河国内の郷村の存在が参考となる。それらの郷村内において、浅間神事役をとおして富士山信仰が次第に広まり、郷内には先達に率いられて富士参詣を果たす人々がいた、と想定されるからである。

『静岡県史料』第三輯に、「静岡浅間神社文書」六一点、静岡浅間神社の関係文書として、「旧新宮神主文書」一五点、「旧

惣社神主文書」一〇点、「旧稲川大夫文書」九点、「旧東流大夫文書」三点、「旧村岡大夫文書」二八点、「旧庁守大夫文書」一二点、「旧先光大夫文書」三点、「旧奈吾屋大夫文書」一八点、「旧山宮大夫文書」一点、「旧玄陽坊文書」七点がそれぞれ収録されている。これらの資料は、南北朝期から江戸初期に至る静岡浅間神社や富士山信仰の歴史をよく伝えている。

このなかで、戦国時代における浅間神社の神事流鏑馬役を勤める郷村の名がまとまって記されている文書が、「旧村岡大夫文書」のなかにある、天文十八年（一五四九）八月、作成された駿河国浅間社役目録に今川義元が証判を据え（紙継目表朱印文「如律令」、村岡氏に与えた文書である。志太郡村岡（藤枝市）に住む村岡氏は、志太郡青山八幡宮と駿府浅間神社の流鏑馬祭礼奉行を勤め、義元の命により駿府に移り住んだといわれる。これとほぼ同様の内容からなる古文書が、「静岡浅間神社文書」にある。永禄元年（一五五八）八月、義元のを継いだ氏真が、村岡左衛門尉にあてた朱印状（朱印文「氏真」）である。

表3は、流鏑馬の郷役を勤めた郷村の一覧である。一部、異同もあるが、ほぼ同じ内容である。文書には、他に「八月青山放生会流鏑馬郷役」、「浅間宮御役銭」の記述があるが、ここでは郷名を挙げるのみにとどめた。このなかで、前掲の「御炊坊道者帳写」の地名と合致すると考えられる郷名をゴシックで示してある。

文書の内容は、浅間神社の五月・六月の流鏑馬神事にあたり、郷役として各郷から銭などを徴収する内容からなっている。郷名の後に、例えば安倍山では「的板三枚同的串三本」、八楠郷では「二年つゝけて御料所方、一年八岡部宗九郎方」、薬科郷では「本ハ一貫六百元致候を、近年もんとうにて如此」などの注記がある。的板・的串は、流鏑馬の小道具として必需品であり、年によって郷役が異なること、問答によって負担額が異なったことなど、興味深い内容となっている。流鏑馬役の注記の分析を通して、今川氏が目論む郷村内部への介入の実態が明らかとなるが、ここでは、郷名と負担額、現在地との比定にとどめる。現在地の比定は、『角川日本地名大辞典 22 静岡県』による。なお、比定地は、市町村合併以前の市町名である。

表 3

駿河国浅間宮御流鏑馬千歳方郷役五月分

郷名	賦課金額	現在比定地
岡部郷	七五〇文	岡部町岡部
安倍山	二貫六〇〇文	静岡市安倍川流域
高柳	二貫一〇〇文	藤枝市高柳
八楠郷	一貫六〇〇文	焼津市八楠
青木郷	一貫六〇〇文	静岡市青木

六月廿日御流鏑馬郷役

郷名	賦課金額	現在比定地
薬科郷	五〇〇文	静岡市薬科川流域
石田郷	一貫一〇〇文	静岡市石田
中田一色	一貫八〇〇文	静岡市中田
池田郷	一貫一〇〇文	静岡市池田
内容郷	一貫一〇〇文	静岡市宇津ノ谷
鳥坂郷	一貫一〇〇文	清水市鳥坂
中瀬郷	一貫二〇〇文	焼津市中根
高松郷	二貫一〇〇文	静岡市高松
漆島郷	一貫一〇〇文	藤枝市築地
河合郷	一貫文	静岡市川合
長沼郷	二貫六〇〇文	静岡市長沼
小沼郷	二貫六〇〇文	焼津市小沼

郷名	賦課金額	現在比定地
安西郷	一貫六〇〇文	静岡市安西
沓谷郷	二貫一〇〇文	静岡市沓谷
瀬名郷	一貫五〇〇文	静岡市瀬名
浅服郷	三貫二〇〇文	静岡市麻機
大住朝比奈山	一貫一〇〇文	焼津市大住
大屋之郷	二貫一〇〇文	静岡市大谷
鎌田郷	一貫六〇〇文	静岡市鎌田
下嶋郷	一貫六〇〇文	静岡市下島
小鹿郷	一貫六〇〇文	静岡市小鹿

有東	一貫六〇〇文	静岡市有東
手越郷	一貫六〇〇文	静岡市手越
由比郷	二貫一〇〇文	由比町由比
西嶋郷	二貫一〇〇文	静岡市西島
下足洗郷	一貫六〇〇文	静岡市下足洗
勝路田	六〇〇文	
久野田	三〇〇文	

八月青山放生会御流鏑馬郷役

稲川郷	長田庄内	服織庄	入江庄	小土郷
前嶋郷	青山	松山保	志田郷	田尻郷
益津郷	同下郷	高部御厨	手越	足窪
岡部郷				

青山放生会とは、藤枝市青山の八幡宮で行われた放生会を指す。挙げられている郷名の他に、永禄元年朱印状記載分として、藪田郷 葉梨郷の名が追加される。

浅間宮御役銭

曲金郷 長沼郷 古庄 池田郷 沓谷郷
有東 小鹿郷 あをいさわ 宮武 高松
熊野 久能寺

義元朱印状には、五月・六月・八月の流鏑馬役の合計として、五三貫五六五文とあり、うち二三貫文が朝比奈刑部方、一一貫六〇〇文が流鏑馬の射手方、残りの二八貫八六五文が年中三度の祭りに供用、とある。

（二）瀬名の利倉神社の創建

①大永八年の浅間大菩薩

宮が崎の静岡浅間神社の歴史については、多くの資料が語る。

瀬名の利倉神社については、その由来が明らかである。幕末、府中浅間前神主の中村高平が撰した『駿河志料』に、當社は、諸郡神階帳に、正五位下庵原郡利倉天神とありて、古社なり、大永年中、瀬名氏鎮護の社として、七社の大神を奉祀する所なり、社に棟札・書写の大神若経を蔵せり。筆者年曆審ならず、大永年前の物なるべし、祭祀は九月九日なり、往時は神職もありしが、退転し、近世は村持となれり、云々とある。そして、大永八年（一五二八）九月の建立の棟札銘を掲載する。それによると、

大日本国東海道駿河州庵原郡瀬名郷奉建立七社事、利倉大明神、浅間大菩薩、熊野三所大権現、八幡大菩薩、神明両宮、當護宮信心建立之、大旦那源朝臣氏貞公並御曹司寅王丸、御年九歳也謹敬白、

干時大永八年戊子九月六日、

代官矢部美濃守 作事奉行多芸伯耆守 公物奉行小林
対馬守 大工左衛門次郎秀吉、

とある。また、『駿河記』・『駿河国新風土記』にも、大永八年の棟札銘が掲載されている。

これにより、瀬名氏貞と九歳の子息寅王丸（氏俊）が、信心によって檀那となり、代官などに命じて七社を建立したことがわかる。七社のなかに、浅間大菩薩の御名が見える。

現在、神社に残る延享四年（一七四五）九月の神社修理の棟札の裏面に、

上古之棟札板朽字癢、維時寛文十三癸丑之槐、加修理
之次、新写正与以伝言窮欲専祭祀者也

とある。

これにより、寛文十三年（一六七三）の秋、社殿修理の折、朽ちた大永八年の棟札を新たに書写した経緯が知られる。

瀬名氏は、南北朝時代に鎮西探題を勤めた今川了俊の子孫といわれる。遠江国見附に住む陸奥守一秀が、駿府に住む幼少の今川竜王丸（氏親）を補佐するために、瀬名に移り住み、在地名を名乗ったという（文亀三年没・一五〇三）。氏貞は一秀の子で陸奥守を名乗り、天文七年（一五三八）に没している。氏貞の子が氏俊で、伊予守を名乗り、今川義元の妹（龍泉院殿、元亀二年没・一五七三）と結婚している。氏俊は、瀬名右衛門佐といい、葛山氏と縁を結び、氏真の代には殊に近親となったという。永禄十二年（一五六九）、今川家没落

の後、氏俊の子の氏詮は相州に移り、慶長六年（一六〇一）、江戸で死去。子孫は、旗本となって幕府に仕えている。

瀬名氏は、戦国大名今川氏の親族として、重きをなしていたわけで、大永八年の棟札は、瀬名一族の富士山信仰の篤さを伝えている。

②慶長二年の新宮浅間御照台

静岡市大岩臨濟寺の護国道場に、明治初年の神仏分離の折、静岡浅間神社からもたらされた仏像や懸仏などが祀られている。その中に、慶長二年（一五九七）に鋳たてられた胎藏界大日如来の懸仏一面がある。径六八cmあり、かなりの重量である。他に、ほぼ同規模の像容の異なる懸仏三面もある。

『鉄山語録』上巻に、慶長二年（一五九七）八月の放生会の折、新宮浅間社の鎖是氏大楽令清通の依頼を請け、妙心寺再住のために上京していた臨濟寺四世住持の鉄山宗鈍が認めた「新宮浅間御照台之銘文」と題する銘文が収められている。その銘文は、懸仏の裏面に朱字で記されている。

銘文には、概ね次のようなことが記されている。

駿府を鎮護する浅間大菩薩は、胎藏界教主大日如来の化身である。神前に懸け奉ってきた本体は、慈悲深い大日如来の御正体である。ところが、悲しいことに、

新宮浅間御照台

『大龍山臨濟寺の歴史』より）



先の天下騒屑により、たちまちにして烏有にきした。社家の鎖是氏清通は、願主となり、大工に命じて旧規の如くに鑄たて、神前に懸けようとした。

しかし、腕の良い大工は多忙で集まらず、壮麗な建物も未だ備わらず、なかなか事業は捗らなかつた。

そこで、法華妙典一千部と金剛般若経六千部を読誦、三宝荒神廟を十三箇所に建立し、三か年の間、念じた。やがて、鑄たてられた大円鏡を神前に懸け、諸般の供養をなした。社家がその銘文を求めてきたので、小偈を付して銘にあてた。

とあり、「必ずや仏の加護を得て、鎮護国家・万民保持疑いなし」と結んでいる。

浅間大菩薩と大日如来、神主や大工たちの名も見え、当時

の富士山信仰の在り様を具体的に伝えている。

三 江戸期駿河人の富士山信仰

（一）慶長・元和期の静岡人の富士参詣

①「道者帳」に見る富士参詣

次の表4は、前掲『浅間文書纂』所収「第四 公文富士氏記録」のうち「五 道者帳」から、静岡地域の富士参詣の事例を抜き出して列挙したものである。資料の中で、先立は先達のことを指す。静岡地域の地名では、ふ中（府中）・うしつま（牛妻）・みね（峰）・宮かさき（宮が崎）・うとふ（有東）の地名が見える。

坊入とは、宿坊に納めた宿代を指す。静岡市域では、金銭を納めている。このうち、慶長十七年六月十日の牛妻の道者に「朝夕」、元和六年六月八日の有東の道者に「召クワス」とあり、宿坊で食事を提供したことを示している。これらは、道者と宿坊の間に特別な関係があったことを伝えている。他には、その記載が無く、いわゆる木賃銭を納めたのである。

表 4

慶長十七年六月 六日	するかノ内ふ中ノ 甚大夫殿先立 拾一人 此坊入六百文
慶長十七年六月 十日	するかノ内うしつまノ 五郎左衛 門殿先立
慶長十八年五月廿八日	□人 朝夕 此坊入三百文 するノふ中 先立左大夫殿 拾六人 此坊入八百文
元和 元年六月十六日	駿府之内 先立土大夫殿 五人 此坊入二百文
同 二年五月廿七日	駿河内ふ中ノ 土大夫殿先立 六人 此坊入二朱半一ツ
同 三年六月 八日	駿河ノふ中 土大夫殿 四人 此坊入三百文
同 五年六月 二日	駿府之 先立土大夫殿 拾六人 此坊入一貫百文
同 六年六月 四日	するが之みね 土大夫殿 廿二人 此坊入二貫百文
同 六年六月 五日	するかの宮かさき 五郎左衛門殿 八人 此坊入七百文そいあした
同 六年六月 八日	するかうとふ 総右衛門殿 拾人 此坊入二百文召クハス
同 九年六月廿二日	するかふ中 土大夫殿 七人 此坊入六百文

②奈吾屋大夫と先達土大夫

前述の事例のなかで、五人の先達のうち、経歴が明らかな先達が土大夫である。

『駿河志料』には、奈吾屋社の鑰取を勤めた奈吾屋大夫に
関わる史料が収録されている。『静岡県史料』第三輯は、こ
れを東京市大森区大井博所蔵「静岡浅間神社関係 奈吾屋大
夫文書」として、一八点を収める。

このなかで、最古の文書は、天文二十一年（一五五二）四
月の、「今川家朱印状」である。浅間奈吾屋柳大夫に對し、
富士參詣道者に袈裟円座木綿の売買を認め、山伏陰陽師の売
込みを禁じた内容である。

朱印 駿河 國中富士參詣之道者爾、從前々為其役袈裟円座

木綿出之處、近年山伏陰陽師出之云々、甚以恣之至也、
於向後如此之儀、堅可制之、其上於有違乱之輩者、可
加下知者也、仍如件

天文二拾一年壬子

四月廿六日

浅間奈古屋

柳大夫

朱印文は「如律令」。この他に、同様の内容からなる永禄
三年（一五六〇）五月の「今川家朱印状」（此の年は、富士

山庚申御縁年にあたる）、天正二年（一五七四）八月の「武田家朱印状」がある。

また、永禄十一年（一五六八）六月の、江尻・清見寺・蒲原船関、先達七人分の諸役所関銭免除の「今川家朱印状」がある。

奈吾屋大夫と先達土大夫の関係を具体的に示す慶長十六年（一六一一）六月の「富士参詣先達土大夫證文」がある。先達の土大夫が奈吾屋大夫に差出した文書で、これにより、以前の土大夫の勝手な振る舞いが赦免され、道者十五人以外に袈裟を売らないことを誓っている。

駿府九十六町の一つに、土大夫町がある。

『駿河国新風土記』は、

土大夫といふ者住せしによりてしかいふ、此土大夫といふ者の事浅間社人大井氏の家に永禄年中土大夫の古証文あり、此大井氏の家古より富士山に登る道者に木綿袈裟といふもの作りて出す、之を受けて登山するのと昔よりの習なり、其の木綿袈裟といふものを此の土大夫の家よりも出すことを載せたり、之によりて推せば土大夫は大井氏の門人の如し、

と詳しく記す。

『駿河志料』にも、

此町は、土大夫といへる者住せしに故に、町名に称す。土大夫は慶長年中の人なり。

とあり、頭注に「土大夫 延宝の頃絶家す」と記す。

富士参詣道者は、参詣の必需品として、先達から袈裟円座木綿などを買ひ求めていたことが知られる。

③袈裟円座木綿

前掲の「静岡浅間神社関係 奈吾屋大夫文書」のなかに、年次欠の「円座木綿襦袢之伝」がある。そのなかに、

一ふし山参り袈裟之事、本法は四筋二てこしらへ申し候、是は略シ、

一円座之事、是も本法ハ四寸四方也、是も略シ、右之心得可有、

一封様之事、目仁諸之不浄見テ、心諸不浄不見トとなへてしたゝめへし、

一かけ様之事、袈裟は如常山伏のかけル如く二かけ、綿ハ□□ニ而ハ前なるやう二かけへし、御山へ上り候ハ、すなわち女のたすきをかけたる如クニして、後を十文字なるやう二かけへし。

とあり、袈裟・円座の寸法をはじめ、袈裟・木綿の掛け方を記す。富士参詣道者に対し、身なりを定めている。

（二）寛文期の静岡人の富士参詣

①「駿州檀所帳」に見る富士参詣

村山の大鏡坊に残された道者帳に、駿河・甲斐・遠江・三河・武蔵の五国分の『富士山檀記』七冊が伝わる。

表5は、七冊の内の一つ「駿州檀所帳」から、天文元年（一五三三）から寛文八年（一六六八）までの、静岡地域の檀所を取り出して表示したものである。

表5

天文廿一年	中嶋
慶安 三年	建穂村
寛文 四年	浅畑池ヶ谷 伝馬町 足堀原村（足久保原村） 江川町 善眼町（浅間町） 七間町 川野辺 八幡村 石田 馬淵村 北長沼村 南長沼村 古庄村 安西 池田新田
同 五年	池田村 聖一色村 八幡小路 北安東 有東 八幡 上寺町 イモジ町 台所町 鷹匠町
同 六年	柳新田 台所町 一色村 栗原村 足久保原村
同 七年	ひじ里一色村 小坂村 呉服町 北安東 柳新田 鍋屋町 有東川原町 大屋（大谷） 池ヶ屋村
同 八年	

このなかで、先達名が明らかかな事例は、
寛文 六年 台所町の助左衛門

寛文 七年 柳新田の市兵衛、台所町の助左衛門、一色村

池田新田の与次右衛門

寛文 八年 小坂村の長右衛門、北安東の太郎左衛門、柳

新田の又左衛門、鍋屋町の助左衛門、大屋の

宗左衛門

の九例である。

先達の名は冠せられていないが、名前の後に「殿」字をおくられている者の名がある。おそらく、名主など、先達に代わって一行のリーダー役を担った人たちであろうか。続いて、同行者の人数が記されている。

社会が安定した寛文期となると、静岡地域の富士参詣の村町、同行者も共に増加している。

②足堀原村（足久保原村）の大日如来懸仏

寛文四年（一六六四）の足堀原村の事例を見ると、六月六日、次右衛門・長次郎・勘十郎の三名が、「卯ノ年立願二脇差上ル」ために、参詣したことが知られる。この「卯ノ年」とは、干支が癸卯にあたる寛文三年のことと考えられる。また、寛文七年の六月七日にも、足久保原村の次右衛門以下、同行三人が参詣している。

足久保に祀られている浅間神社について、『駿河国新風土記』は、

浅間社 原村の産土神なり、除地一斗九升

と簡潔に記す。『駿河志料』もほぼ同様である。『改訂静岡市神社名鑑』によると、宝永二年（一七〇五）、大宮の浅間神社より勧請されたとある。

本年九月、安倍川筋の浅間神社の分布を調査した折、足久保口組で浅間神社の総代を勤める石谷守氏の御好意により、神社本殿に祀られている懸仏を拝見する機会を得た。

山裾の木立のなか、昭和二十三年（一九四八）九月に建てられた本殿（覆屋）の中に、江戸時代の古い祠が安置され、その中に檜材の懸仏大小二面が祀られている。像は、共に浅間大菩薩の本地仏である胎蔵界大日如来である。

径二八・五cm、像高二〇・五cmを数える懸仏（一）は、像と光背の円盤部が別に仕立てられており、像の頭部は、胴体部に差し込まれている。円盤部は、二枚の木材を竹釘で接合している。

径三七・六cm、像高二七・五cmを数える懸仏（二）は、像と光背の円盤部が一枚の板材で仕立てられている。いかなる理由からか、不明であるが、この懸仏の裏面は手斧で削られている。部分的に墨痕が認められるが、文字の判読はできない。

懸仏（一）



懸仏（二）



二面とも黒漆が剥がれ、下地の胡粉が現れた状態で、痛みが進んでいる。

これらの懸仏の製作年代は、明らかでない。一枚は、あるは、浅間神社勧請の折に作製され、奉納されたのであろうか。

③『改訂静岡市神社名鑑』に見る浅間神社の分布

静岡市域（旧清水市域を除く）において、『改訂静岡市神社名鑑』により、祭神・配祀神として木之花咲耶姫命（表記は区々）の御名を確認できる神社を挙げると、表6のようになる。

神社の勧請年月について、多くは不明とある。そのなかで、祭神・修造・再建・合祀など、棟札や古文書などの資料により明らかな場合、その概要を記した。所在地について、前掲の「御炊坊道者帳写」（戦国期）地名と一致する場合は◎印を、「流鏑馬神事郷役」（天文期）地名と一致する場合は○印を、「駿州檀所帳」（寛文期）町村名と一致する場合は△印を付した。重複する場合は、古い資料による。

表6

浅間神社	祭神木之花咲耶姫命	◎宮ヶ崎
先宮神社	配祀神三柱の内、木花開耶姫	◎横内町
天神社	祭神四柱の内、木花佐久夜毘賣命	大岩
浅間神社	祭神木花咲耶姫売命 慶長一六年	○北（麻機）

須賀神社	境内社浅間神社	◎沓谷
愛宕神社	祭神二柱の内、木花開耶姫命	◎沓谷
利倉神社	祭神木花開耶比売命 配祀神六柱 大永八年棟札	◎瀬名
軍人社	境内社浅間神社	◎曲金
浅間神社	祭神木花咲夜姫命 安永二年再建	小黒
浅間神社	祭神木花開耶姫命 天明八年再建	柚木
高杉神社	配祀神二柱の内、木花開耶姫命	◎長沼
浅間神社	祭神花開耶姫命 安永二年修造棟札	△聖一色
池田神社	配祀神五柱の内、木花開耶姫命	○池田
千勝浅間神社	祭神木花咲耶姫命	稲川
諏訪浅間神社	祭神木花咲耶姫命	○高松
浅間神社	祭神木花咲耶姫命	用宗城山
浅間神社	祭神木花開耶姫命 天明三年再建	羽鳥
白澤神社	祭神木花佐久夜毘賣命 明治四二年合祀	◎牛妻
浅間神社	祭神木花佐久夜毘賣命	郷島
浅間神社	永禄一三年海野文書（『駿河志料』に「浅間御神領」）	
浅間神社	祭神木花開耶比賣命 宝永二年勧請	○足久口組
坂ノ上神社	祭神木花咲耶媛命	坂ノ上

白髭神社	配祀神二柱の内、木花咲哉姫命	中沢
白髭神社	祭神三柱の内、木花開耶姫命	落合一八六九
白髭神社	祭神五柱の内、木花開耶姫命	落合

おわりに

北遠山間の人々が、富士山を遥拝し、いかに参詣したか、また、平場に住む人々がいかに浅間神社を勧請し、富士山に参詣したか、具体的な事例により、年代を追って検討した。

資料としての道者帳は、限定された時期の、しかも記された内容は特定地域に関する情報であり、富士山信仰全体を把握するものでない。信仰の証としての、浅間神社の勧請や祭祀を検討したが、これまた不明とするところが多い。前掲の各地域に祀られている浅間神社の勧請の経緯を検討し、富士山信仰がいかに展開していったか、今後の課題としたい。

おわりにあたり、水窪町附属寺住職南屋英光師、佐久間町の伊藤賢次氏、元佐久間高校校長の森下栄之助氏、静岡護国神社禰宜の菅原久雄氏、瀬名利倉神社宮司桜井仁氏、足久保浅間神社宮司中村邦博氏、大岩臨濟寺住職阿部宗徹師、郷島秘在寺住職武山清堂師をはじめ、多くの方々の御協力をいただいた。あらためて篤く御礼を申し上げる。

参考文献

- 『浅間文書纂』（浅間神社編 昭和六年）
- 『静岡県史料』第三輯（静岡県編 昭和九年）
- 『静岡県神社志』（静岡県郷土研究協会編 昭和一六年）
- 『静岡県史』資料編7（静岡県編 平成一二年）
- 『駿河志料』（一）（四）（歴史図書社 昭和四四年）
- 『修訂駿河国新風土記』上巻・下巻（図書刊行会 昭和五〇年）
- 『駿河記』上巻・下巻（臨川書店 昭和四九年）
- 『角川日本地名大辞典22 静岡県』（角川書店 昭和五七年）
- 『巫女と仏教史』―熊野比丘尼の使命と展開―（萩原龍夫 昭和五八年）
- 『富士山御師の歴史的研究』（甲州史料調査会編 山川出版社 平成九年）
- 『改定静岡市神社名鑑』（静岡県神社庁静岡支部編 平成一〇年）
- 『大龍山臨濟寺の歴史』（臨濟寺編 平成一二年）
- 『近世富士山信仰の展開（一）』（『常葉大学教育学部紀要三五号』平成一七年）

（平成二十七年十一月十七日脱稿）

（追記）

平成二十八年一月、三重・奈良両県における富士山信仰の遺跡を訪ねる機会を得た。

志摩市磯部の迫間では、加藤チャさん（昭和一五年生）は、熱心な富士山信者で、各字に「浅間山」が祀られているとのお話をされた。迫間の谷口みずさん（昭和二年生）・南ときゑさん（昭和一一年生）の案内を得て浅間山に登り、享保七年（一七二二）の大日如来像を拝観。南伊勢町では、教育委員会の服部英世氏から、町内の富士山信仰の概要を伺い、文化財審議委員の山本 篤氏（昭和五年生）の御案内を得て五か所浦の浅間山に登り、延宝六年（一六七八）の大日如来像を拝観。また、同神津佐の浅間山では、江戸期の大日如来像を確認することができた。これらの地域では、今も地域の人々による祭祀が行われている。奈良県大和郡山市では、県立民俗博物館の横山浩子氏から、県下の富士山信仰の概要をうかがうことができた。

ここに、あたたためて御協力いただいた多くの方々に篤く御礼を申し上げる。